死神と謎の錬金術師

ピンクネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死神と謎の錬金術師

【Ｎコード】
Ｎ９２１５Ｖ

【作者名】
ピンクネコ

【あらすじ】
一護はゆめを見た。一護はただの夢と思い、いつも通りの生活を過ごしていた…。だが、一護が見た夢はただの夢ではなかった。一護とその仲間たちの周りでいったい何が起こるのか……！？

一護の見た夢

一護
『ん…、ここ、何処だ？』

一護は何故か目を開けたら自分には全く見知らぬ場所に倒れていた。
というより、周りは暗く、自分は何処にいるかわからない。わかるのは、自分の近くに転がっているビンだけだった。

一護
『俺確か、明日学校だから学校の準備して、早く寝ようとベッドに入って…』

一人でブツブツと考えた結果

一護

『そうか！これは夢だ！なんだよ、脅かせんなよ』

と、一人て納得したあと、何となく周りを見渡してみた。だが、やはり暗いためよくわからない。

一護
『夢っていってもここが何処なのかって疑問は消えねな。つか、まじで何処だよ、ここ』

そんなことを言ってるうちに目が慣れてきたのか、何か見えてきた

一護
『おっ、何か見えて、き…た……』

一護が見たものは、

一護
『っ！！な、なんだよ…これ…！』

一護は見たそこには、血だらけの、右腕と左足が無くなっている、小学４、５年くらいの少年と、２m近くあるであろう、全身鎧の男がいた。

普通の人間なら、こんな奇妙な光景を見て驚かない人間はいるだろうか。いや、まずいないだろう。

少年はほんらい右腕があるであろう場所を左手で押さえている。とても、辛そうだ。

もしかして、あの鎧男が少年の腕と足を切ったんじゃないのか、と。

一護
『くそ…！』

一護はここが夢の中だということを忘れて少年を助けようとした。

だが、一護より先に動いたのは鎧男だった。

鎧男は少年を抱え喋りかけた。とても必死そうに。
少年は何かを言っている。

少年
『へへ…、ごめ・な、右・・本じゃ、・・・・・魂し・・・・・・でき・・・かった・』

鎧男
『なん・・・を…！！』

途切れ途切れで、なにを話しているかわからない。だが、鎧男は少年を心配していることはわかった。

2人は何かあるのだろう、目の前えと視線を上げた

少年は何かを言っている

一護

『（何かあるのか？）』

一護も2人の視線の先を見てみた

一護

『っ！！なっ…！』

そこには大きな円の中心に得体の知れないものがあった。その得体の知れないものには人間の手や足、骨などがあった。それに、血もあった。

もさかしたら、もとは人間だったんじゃないのか？一護はそう考えた。

だが、それは人間の原形をとどめていなかった

一護

『（何か、関係があるのか…？）』

一護はそのことについてきこうと、近づこうとした……そのとたん…

一護

『うっ…！』

一護はからだが動かなくなり、そのまま倒れてしまった。
それは、現実に引き戻されるサインだった。

これは一護の夢……。だが、一護は知らなかった…。これはただの夢ではなかっことを…

これから起こることなど、想像してなかったことが…今始まろうとしている……

一護の日常（前書き）

説明ばっかりでつまらないと思われます。しかも駄文…

あと、「鋼の錬金術師」はまだ出ません。次の話で出ます！！（多分）

それでもいい人は、本文へＧＯＯＯＯＯ！！

一護の日常

「起っきろ〜！いっちっ、ゴフッ！！」

コッケコッコー、というニワトリの鳴き声が聞こえそうな朝。
普通ならカーテンの隙間から入りこむ太陽の光で目覚めの良い朝が迎えられるはずだった。
だが一護の父、一心のせいでそれは叶わなかった。

「起きてすぐの息子に攻撃するたー酷い父親もいたもんだな」

「痛い痛い！頭！頭が潰れる！」

起きてすぐ自分を蹴ろうとしてた父を蹴り、頭を踏みつけた。

「お兄ちゃーん、お父さーん、ご飯ですよー！！」

一護と一心の危険なスキンシップ中、一階から女の子の声が聞こえてきた

「おー、今行く」

と、返事をしてから、一護は父を無視って、制服に着替えてから一階へと急いだ

「早く食べないとご飯冷めちゃうよ」

「一兄、よくあんなバカ親父に相手するよね」

一護が一階に行くと椅子に座って、朝ご飯を食べてる一護の妹である遊子と夏梨がいた

「俺だって相手したくてしてるわけじゃねぇよ。そういえばルキアは？」

「ルキアちゃんなら先に行ったよ。今日は日直だからって」

「そうか、って！もうこんな時間かよ！」

父とのスキンシップのせいで家を出る時間がきてしまった。
一護は時計を見るなり、急いで遊子が作った朝ご飯を食べ、急いで玄関へ向かった

「お兄ちゃん、いってらっしゃーい」

「おぉー」

一護は返事をしてから、一護の通っている空座第一高等学校へと走った

「（てか、俺久しぶりに夢見たような……何かヤバいもん見た気がするけど覚えてねぇな、まっ、いっか）」

一護は走りながら久しぶりに見た夢のことを思い出した。
だが、ただの夢とおもい学校へと急いだ

そんなこんなで、学校に着き一護のクラスの1年3組に向かっていた。
そのとき、ドタドタと一護のほうに走ってくる1人の男が来た

「おっはよ〜〜！い〜〜ち〜〜ゴフッ！！」

「おーす」

一護の友達の浅野啓吾だった。一護は驚くことなく、呆れた顔で左

腕を直角に上げた。
そこに丁度、啓吾の首に当たり倒れてしまった

「一護、おはよう」

「おぉ、水色おはよう」

さっきのことなんて最初から無かったかのように、あとから、友達の小島水色が来た。
2人は挨拶したあと、自分たちの教室、1年3組へと入って行った。

「置いてかないでー！」

2人に置いていかれた啓吾の叫びが2人がいなくなった廊下に響きわたった

「あっ！黒崎君おっはよう！」

「おはよう、一護」

「おはよう、黒崎。相変わらずノーテンキな頭でなにおりだ」

「あら～黒崎君、おはようですわ。」

教室に入ってまず最初に挨拶したのが、井上織姫

その次が、茶渡泰虎

次に、石田雨竜

最後に、朽木ルキアである。

「あぁ、おはよう。てか、ルキア。お前、今日日直じゃねぇだろ」

「たわけ。貴様が遅いからでわないか」

ルキアはさっきと一変して現在では普通使わないような言葉使いで一護に反論した

「へーへー」

一護は軽く返事した。

「おっ、一護、おーす」

「おーす、たつき」

さっき教室に入ってきたのは、有沢たつき

「おはよう、たつきちゃん」

「おはよう、織姫」

たつきは一護の幼馴染みで、織姫とは親友である

「おーす」

1年3組の担任、越智先生が先生からず挨拶を生徒達にして入ってきた

「おーら、席着けヤローども。おーし、今日も1人も欠けずに揃ってるなー。」

出席簿を持ってるにも関わらず適当に出席をとった

「大島と反町はいつもいないけど、あいつらはヤンキーだから。ま

っ、いいや。絶対元気だろ」

本当に先生なのかと思う人もいるが一応、1年3組と国語の担任である

「そんじゃ、先生からの連絡だ。良く聞いとけよ。今日は……。」

これが、黒崎一護たちの【表向き】、つまり【普通の人】でも知ってることである。

それでは、【裏向き】、つまり【普通じゃない人】が知ってることは何か。

それは、これを見ればすぐにわかってしまう

「おらーーーーー！！」

雲一つなく、綺麗な満月が見える、寝静まった夜

そんななか、人間の大きな声が聞こえる。

さっきも言ったように、今は真夜中。周りは光をなくした家ばかり。光があるとしたら電柱についているライトだけ

そんな、夜に大きな声を出せば住民たちが起きてしまい明かりを点ける。

簡単に言うと近所迷惑だ

だが、家にはいっこうに明かりが点かない。

いや、点くはずはない、【普通の人】ならば…

明かりが点く、イコールその声が聞こえるから、またはうるさいからというのが普通であろう

つまり、明かりが点かないのは、ただたんに聞こえてないからだ

何で聞こえないの？また、新しい疑問が浮かぶ。

それは簡単なものだ。

何故ならこの声を発したものは【人ではない】からだ。そして、人ではない者の正体、それは……

【死神】

死神、といきなり言われたら悪い想像ばかりするだろう。

黒いフード、そこからのぞく骸骨の顔、大きな鎌。人を死へと導く者。

これは、人間の想像にすぎない。

本当の死神はこんなことはしない

死神は整（プラス）、世に言うユウレイを尸魂界（ソウル・ソサエティ）、あの世へと送ったり、虚（ホロウ）、

世に言う悪霊を退治する者なのだ

「やっと終わったぜ」

「そうだな。しかし、ここ最近、虚がやたら出てくるな」

「そのお陰で寝不足だっつーの」

この2人は学校に通っていた、一護とルキアなのだ。
そう、この2人は死神なのだ。
詳しく言うと一護のほうは死神【代行】だったのだ。

「明日にでも浦原に調べてもらうか」

今夜の死神の仕事は無事終わった。

明日はどうなるのか

一護の日常（後書き）

途中、説明がわからなくなったので断念してしまいました…

ここまで、見てくださりありがとうございます！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9215v/

死神と謎の錬金術師

2011年10月9日15時01分発行